第2回 新嵐山スカイパーク自分ごと化会議　議事録

1. 開会

2　前回の振り返り　（一社）構想日本　統括ディレクター　伊藤氏

　・会議の前半で、芽室の現状及び自分ごと化会議を開催した経過を説明し、後半のグループ

ワークでは、自己紹介と新嵐山スカイパークについて感じていることを発言して頂いた。

・この会議は事前にシナリオはない。前回の話し合いの結果を受けて、資料準備してもらっている。その時々で柔軟に変えていけるのが、この会議の特徴であるが、これは行政の会議で当たり前のように見えるができていないことである。

・Ａグループでは、事実に基づく議論を進めるため、実際にどうなのか、事実を明らかにするため、事務局に説明を受けながら進めた。

　　その議論を踏まえ、今回の会議でスカイパークの収支状況とアンケート調査を資料として準備してもらった。

リニューアルしたことで変わったところ。特に、両グループで出たのがレストラン。

　　新嵐山スカイパークのメインターゲットは誰か。2つの視点で考えていく。一つは町民向けなのか、町外向けかの視点。もう一つは世代（若者か高齢者か両方か）の視点。

　・Ｂグループではスカイパークへの思いを話し合ったが、スキー場に対する思いが強かった。

　　利用頻度を上げるためには、情報発信が必要である。

　　町民にとってのスカイパークの位置づけが重要である。

　・会議の中で一定の方向性を出すが、ここで出た方向性が自動的に町の方向性になるもの

ではない。今後、行政や議会の中で検討されていく。

　・皆さんからいただいた質問に対し、現状はどうなっているのか、この場で共有することに

気を付けていきたい。

　・条例では2つの目的が入っている。これが利用実態に合っているのかを考えていきたい。

3　新嵐山活用計画について　　魅力創造課　参事　小林

【1 新嵐山活用計画とは】

・新嵐山活用計画は、新嵐山のあるべき姿を明確にし、具体的なビジョンを示したもの。

【2 新嵐山活用計画の具体的アクション】

・新嵐山活用計画は、町のホームページに公表している。

　・新嵐山スカイパークのあるべき姿を示したものがビジョンであり、これが新嵐山の

あるべき姿＝ゴールと捉えている。

・「農村地帯の宿」について、農村とは、主に農業を生業とする人びとが構成する地域社会

で、山村、漁村とともに、都市に対する村落の呼び名。

　新嵐山スカイパークは、周辺を畑や牧草などに囲まれており農業を生業とする人々が

生活している地域の中にある宿泊施設であることから、計画の中では農村地帯の宿と

いう名称を用いている。農村地帯の宿＝リュラル インと表現しているが、リュラル

は「田舎方式」、インは「宿」を意味し、これらを掛け合わせ、農村地帯の宿という

意味の造語である。

・ターゲットは、新嵐山スカイパークの設置条例に基づき、設定している。

本計画の策定にあたり、交流人口（関係人口）の増を目指すため、幅広い層を受け入れる

ことに重点を据え、「町外からの来訪者」をターゲットとして新たに加えている。

もう一つのターゲットである「町民」は、活用計画では、町が財産を持ち続けることを

前提に進めており、①町の財産＝町民の財産であること、②観光施設は地元住民の利用

なくして、応援なくして運営を維持することは困難であること、③町民の皆さんに新嵐山

を誇りに思い、自慢してほしいという思いを込め、設定したものである。

・「既存フィールドの見直し及び新規フィールドの活用」では、エリア全体を一つの宿と

して捉え、ビジョンに基づくテーマに沿ったフィールドづくりを展開するため、4つの

プランを示している。

【3 新嵐山スカイパークの設置目的】

・設置目的について、町の条例では「町民の健全なレクリエーションと健康の増進を図ると

ともに観光の振興に寄与するため、新嵐山スカイパークを設置する」と定めている。

条文の前段部分では芽室町民を、後段部分では町民以外をそれぞれ対象とすることから、

町民及び町外からの来訪者をターゲットとして設定している。

【4 その他】

前回の議論に基づく共有資料についての説明。

4　グループワーク

　・別紙議事録を参照のこと。

5　その他

　・次回以降の会議については、議案に記載のとおり。

6　閉会